皇帝夫妻の秘密

akira

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
皇帝夫妻の秘密

【Ｎコード】
Ｎ５９６５Ｏ

【作者名】
ａｋｉｒａ

【あらすじ】
異世界へ飛ばされたアキは、やがて国の皇太子ライアスと出会った。結婚すると同時にライアスは皇帝となり、妻であるアキもまた皇后に。約一年後にライアスの子を身籠るが、それが波乱の幕開け。ある日を境にアキは異世界に飛ばされてからの記憶を失ってしまった。そんな妻の様子に最初は項垂れるだけだった夫も、徐々にある女の影に気が付く。

闇の声（前書き）

ライアスとアキが出会った当時のライアスの肩書を皇太子→皇子に変更しました。

闇の声

『異界の娘よ、遂に王の子を宿したな……よくも…よくも……っ！』
闇の中、どこからか悲痛な声が聞こえた。

――あなたは、誰……？

女の声とは分かるものの、その姿は見えない。

『そこは、妾の場所じゃ……妾のものじゃ……』

――一体何……？

『許せぬ。妾が手に入れるはずのもの、お前のような娘が易々と……！』

――私が、手に入れたもの？

『そうじゃ。そたなたは遂に、王の子をその腹に宿した。喜ばしいことよの。――だが、その子が産声を上げることはなかろうて。……妾が、妾がそうはさせぬわっ！』

「……っ！？」
突如として腹部に激痛を感じたアキは、横たわった状態のままほとんど反射的に身体を折り曲げた。
痛さのあまりに呼吸が上手く出来ない。
心臓が激しく拍を打つ。

全身の血液が一気に沸騰しているような感覚。
にもかかわらず、背中には冷たいものが伝う。
膝頭が自分の鼻先につくほどに身体を丸めて腹部を抑えていると、先ほどまでの激痛は少しずつ引いてきた。
呼吸はまだ荒い。新鮮な空気を肺が欲している。
（……何なの）
痛みのあまり歪んでいた視界が、徐々に正常さを取り戻してきた。
時刻はまだ夜明け前のようだ。あたりは闇に包まれ、新月のささやかな明かりがカーテンの隙間から室内へ差し込んでいるのが薄い天蓋越しに窺えた。
嫌な汗が肌に滲んでとても気持ちが悪い。
いっそのこと湯浴みでもしたいところだったが、腹部にはまだ鈍い痛みがあるし、こんな夜更けに「汗をかいた」などと女官を呼びつけるのは気が引ける。
それに、何より起き上がる気力が湧かない。全身が気怠く、寝返りを打つのも億劫だ。
「……ライアス」
ここ数日多忙を極めている夫とは、まともに顔を合わせていない。
異世界からやってきた人間であるアキと当時まだ皇子であったライアスは出会い、そして今から約一年前に二人は夫婦となった。
そしてほぼ同時期に前皇帝であるライアスの父が彼に玉座を譲り、今はライアスがこの国――ルザンドールの皇帝だ。
結婚から一年が経とうとし、広すぎる寝台にも慣れたかと思っていたが、こんな風に不意に心身に隙が生じると、無性に寂しさを覚える。
こちらの世界へやって来たばかりの頃は、養父と養母が心の拠り所だった。今はそんな二人に夫が加わっているが、彼は一国の主。国民皆の拠り所でもある。かといって、養父と養母は帝都から少し離れた海辺の領地で隠居生活を送っているので、結婚してからはそう易々と弱音を吐くことのできる相手ではなくなってしまった。

「……会いたい」
それは養父母か、夫か。
脳裏に三人の顔が浮かぶが、アキは徐々に瞼が重くなっているのを感じていた。
（眠れるなら、眠ったほうが楽だよね……）
意識が沈んでいく中、三人の顔も同時に霞んでいく。
そして、どこからかまたあの声が聞こえてきた。

『……その子が産声をあげることはかなわぬ。妾が、決してそうはさせぬ』

幕開け

明け方、疲れ切った様子で皇后の部屋を訪れた若き皇帝ライアスは、寝台の片隅で静かに眠っている妻の姿を目にするとその双眸を細めた。

ライアスは城に嘆願のためやって来ていた地方の領主と今の今まで議論を重ねていた。数日間続いていた忙しさも、これでひと段落つくだろう。そう思ったら、久しく顔も見ていなかった妻の顔が脳裏によぎり、既に明け方であったにも関わらずこうして彼女の元を訪れた。

着ていた堅苦しい上衣やら装飾やらをはずすと、降ろされていた天蓋を潜り、寝台に上がってアキの隣に横たわった。

「――アキ」

反対側を向いている妻の前髪をそっと後ろへ梳きながら、小さく名を呼んだ。

眠りの浅いライアスと違い、アキは割と定時まで目を覚ますことはない。

どれだけ性能の良い腹時計だ、と以前に腹を抱えて笑ったら、アキは失礼ね、と口を尖らせた。

露わになった額に静かに口付けを落とし、アキの背後から抱き込むように身を寄せると、ライアスは自分も眠りにつくため瞼を閉じた。

朝になって目が覚めたら、自分が隣に眠っていたことに妻は驚くだろうか。そんな子供の悪戯のような思惑を密かに抱きながら。

アキはその日目覚めると、まだ少し覚醒しきらない意識の中でも、明らかにその違和感を捉えていた。
シングルではなく、いったいどのサイズなのかも定かでない広いベッド。しかも天蓋付き。近所のチェーンの家具店で購入した布団ではなく、肌触りの良い上質なリネンに、うっすらと刺繍が施してある枕。しかも枕は４つもある。
薄い天蓋の向こうに窺えるのは、６畳の部屋などではなく、広々としたまるでどこかの高級ホテルのスイートを髣髴とさせる寝室の風景。
そして何よりの衝撃は、自分の腹に背後から回されていた男の腕。首だけ振り返れば、目の前には金髪の青年の寝顔があった。
思わず自分の衣服を確かめるが、どうやらコトを致した形跡はなかった。
しかし、着ていたのは薄い生地で出来た夜着で、そのために青年の体温や触れる感触がかなりダイレクトに伝わっていた。
まだ起き抜けだというのに、アキの心臓はバクバクと音を立てている。
（どっ、どういうこと……）
「……ん」
呆然としていると、青年が身じろいだ。
何だか気まずく思って、アキは慌てて起きる前の体勢に戻る。

『――起きたのか……？』
何を話しているのか、全く理解できなかった。
寝起きのためか、その声は少し掠れ気味だったが、滑舌が悪すぎて日本語に聞こえない、とかそんなレベルでは無いことは確かだ。
明らかに、アキの知らない言語。
青年の息遣いが首筋に微かに触れ、アキはピクリと肩を震わせた。
『アキ、寒いのか？』
面識の無いハズの青年は、アキの名を知っているようだ。
辛うじて自分の名前を呼ばれたことだけは分かる。
何やらひどく優しげな様子で彼女を気遣うと、更に身を寄せてきた。
――正直、嫌では無かった。寧ろ心地よいし、しっくりと来る感覚。
しかし、どう考えてもここはアキの知らない場所で、青年の顔にも見覚えは無かった。
第一、自分は昨日確かに自宅の自分の部屋で眠りについたはずだった。
『アキ？』
あまりに反応が無いことを不審に思ったのか、青年が身を起こしてアキの表情を窺ってきた。
「オ、オハヨウゴザイマス……」
バッチリ目が合ってしまい、とりあえず朝の挨拶。
（いやでも、これ日本語だし……通じないよね）
当然のように、青年は一瞬首を傾げた。
（ほらね。えっと、何語なら分かるんだろう？）
「グッドモーニン。ボンジュー。オ、オーラ？」
立て続けに自分が知りえる言語の挨拶を言ってみる。
ところがどっこい、青年が返してきたのは……。
「オハヨウ」
「っえ、日本語！」

まさかのチョイスだった。
『どうした。まさかこちらの言葉を忘れたわけじゃないだろう？』
呆れた表情でまた何か問われているが、再び意味不明の言葉だ。
「……ねえ、それ何語なの？　っていうか、まずどちら様？」
青年を指さして、首を傾げてみた。
『何を言っている？　夫の顔も忘れたのか？』
尚も首を傾げ続けているアキに、ライアスは段々と不信感を募らせた。
『しばらく放っておいたのは悪かったが、そんなに怒っているのか？』
「英語じゃないし……フランス語、スペイン語……？」
『頼むから、いい加減にしてくれ。アキ』
「私のことは知ってるみたいだよね……」
「ゴメンナサイ」
「謝った！？」
『これ確か謝罪の意味の言葉だったよな？』
「ええ、どういうこと。日本かぶれの外国人なの！？」
『何なんだ』
たまに機嫌を損ねると自分の世界の言葉に戻ることはあったが、どうにも妻の様子がおかしいと感じ始めたライアスは、ひとまず上体を起こして体勢を立て直した。
つられてアキも起き上がると、険しい表情を浮かべるライアスに対峙して座った。
『俺はライアスだ。お前の夫で、この国の皇帝』
馬鹿みたいだが、どうやら本当に言葉が通じていないらしいので仕方なく、ライアスは自分のことを指さしてそう言った。
「ら、ライアス？」
どうやら聞き取りはさほど問題無いらしい。アキは一度で正しい発音をしてみせた。
それもそうだ。妻の異変については昨日まで何の報告も受けてい

ない。ということは、恐らくは昨日までは普通にこちらの言葉を話していたのであろうから。
『そうだ、ライアス。そしてお前はアキ。私の妻で、この国の皇后。私たちは一年ほど前に結婚し、夫婦となった』
アキ、という部分では頷いたものの、やはりそれ以降の言葉ではあまり良い反応は返ってこない。
ライアスは、今まで時々教えてもらっていたアキの世界の言葉を必死に思い出そうとする。
（夫と妻は何と言うんだったか）
「……ダンナサン。オクサン」
言って、自分とアキを交互に指さすライアス。
「へえ、あなたが旦那さんで、私が……奥さん！？」
見事なまでに驚愕の表情を浮かべたアキに、ライアスは頭を抱えた。
（やはり、記憶が無いのか……ただ寝ぼけているには、度が過ぎているよな？）
「どっどういうこと？　何で、どうしてそんな！」
『落ち着け。俺にだって理解できてない。昨日変なものでも食べたのか？　それとも、しばらく放っておいた俺への天罰か？』

項垂れる皇帝と、パニックを起こしているその妻。
果たしてこれから二人、いや、もしかしたら三人の運命は如何に。

医者の見立て

「一体何があったんです、陛下？　アキ様がこちらの言葉が話せなくなったなど……」

皇后の寝室に続くこれまた皇后の居室には、二人の青年が揃って眉間にしわを寄せていた。

一人は長椅子に座り、憮然とした表情で腕を組んでいるこの国の皇帝ライアス。そしてもう一人は、ライアスの側近であるエルマーだ。

「……それは俺も知りたいところだな。それにあの感じ、恐らく記憶も失っているぞ。こちらの世界に来てから、五年間の記憶が無いようだ」

はあ、と一際深いため息を吐き、ライアスは肩を落とした。

それから、ジロリ、と寝室のドアに視線をやる。

念のため、現在寝室でアキは医師の診察を受けているところなのだ。

「病気なら、それはそれで対処法があれば良いが。そうじゃないとしたら、どうすればいいんだ……」

「そうですね。アキ様の存在自体があまり例が無いことですけれど、こちらに来て五年も経つというのに、突然こんな風に異変が起きるというのは実に不可解ですね」

「毒でも盛られたのか……だが、何のために記憶だけを奪う？　存在が邪魔なら、殺傷力のあるものを使うはずだよな」

「わざわざ毒を盛る危険を冒してまで、記憶を奪うというのは、どんな意図があってのことなのか。皆目見当がつきませんね。それに記憶を操ると言えば、巷では黒魔術や催眠術がその手のものとしては有名ですから、毒で記憶をどうのというのは難しいんじゃないでしょうか」

「毒の線はなしか。朝廷にはアキの存在に納得していない者も少な

くはないがな……あれが皇后になってから一年だ。今更なんだと言うんだ」
ドアから視線を外したライアスは、虚空を睨んでそう言った。
「やっと公務がひと段落して、ゆっくりできると思った矢先にこれか……天は存外に意地が悪いな」
「昨日も会談が終わってから直行なさったようですね。当分はご自身の寝室には帰らないおつもりだったのでしょう？」
含んだような微笑を浮かべ、エルマーは己の主に視線を送った。
「黙れ」
さっきよりも更にむすっとした声が返ってきた。
「しかし、記憶を失っている今のアキ様は以前とは違い、ある意味ただの妙齢の女性。皇后とはいえ、陛下は今後あの寝室に通われるのはご遠慮いただくべきですね」
「分かっている。今朝で既に色々と思い知らされているんだ。これ以上言うな。――大体お前、意外と下世話なやつだな」
「何のこれしき。陛下の側近たれば当然の配慮です」
わざわざ姿勢を正してそんなことを言うエルマーに、ライアスは片方の眉をピクリと痙攣させた。
「お前な……」
そのとき、寝室のドアが開かれ、中から老齢の医師が出てきた。
気配を察し、ライアスは即座に立ち上がって医師の傍に歩み寄る。
「皇后の体調はどうだった？」
「特にご不調のご様子はございませんな。しかし、これはまだ確信があるわけではないのですが……」
老齢の医師は、何か口にするのを渋るように口元の髭をなぞった。
「何だ。些細なことでもいい、医師のお前が感じた異変があれば言ってみろ」
「これは長年の経験上の、あくまで私めの勘なのですが」
「何なんだ。早く言え」
「これはなかなかに王家にとっては繊細な問題かと思われますので、

あまり無責任な発言はできないのですがね」
「さっさと言え！」
医師がやけに答えを渋って、普段は冷静にして聡明な君主であると名高い皇帝が焦っている様子を楽しんでいるのは、周囲の人間には明白だった。お茶目で有名なこの老齢の皇帝付医師にからかわれていることに気づいていないのは、皇帝本人だけだ。
「バークレイ先生、こんな陛下は大変からかい甲斐があるのは確かですけれど、そろそろ本題に。陛下は既に皇后様がご自分のことを忘れられているということで深く傷ついておいでなので」
「うむ。そうですな。こりゃ失敬」
少し残念そうなバークレイを「この狸じじい、俺をからかっていたのか！」と今にも殴りかからんライアスだったが、エルマーに「陛下、それより今はアキ様のことですよ」と素早く諭され、イラつきながらも医師に先を促した。
「ええ、では。あくまで私めの勘ではございますが、皇后アキ様――どうやらご懐妊されておいでです」
医師らしい真剣な表情でそう語るバークレイに、ライアスのイラつきは急速に熱を下げていく。
「……今、懐妊していると言ったか？」
呆然とした様子で問うライアスに、「あくまで勘ですがね」と言いつつお茶目な医師は頷いた。
「恐らくまだお子を宿してそう経っておられないので、ご本人もあまりご自覚なさっておられないでしょうが、これから徐々にお身体の方に変化が表れてくるかと思います」
おお、と感嘆の声を漏らしたのはエルマーだ。
ライアスは医師の話をどうにか咀嚼しようとしているらしく、口を開かない。
「それが確信に変われば、王家にとって素晴らしい吉報ですね。ご成婚から一年。いよいよその時が来ましたか」
「確信を見出すには、もう少し時間がかかるでしょう。それまで、

なるべく安静になさった方がよろしい」
医師の言葉に、エルマーは頷く。
皇帝にとって、後継ぎを成すということは最大の義務である。
それを促すのは、側近である彼の任務でもある。
「……だが、今のあれには俺との子を喜ぶことなど出来るのか？」
本来一番このことを喜ぶはずのライアスは、現状を飲み込んだ瞬間、背筋に冷たいものが伝うのを感じた。
「知らぬ間に、知らぬ男の子を腹に宿すなど、女にとってそれはとてつもなく恐ろしいことなのではないのか？」
「……陛下」
「そうかもしれませんな。ですので、一応のところ、皇后様にはまだこの件伝えておりません」
「にも関わらず、こんなすぐ隣の部屋でお話になったのですか、先生……」
「神経が高ぶって落ち着かない、と仰せでしたので、少し気分を落ち着けるお薬をお飲みいただきました。皇后様は普段から薬をお飲みになる機会が少ないお方だったので、よく効いたようで、今は眠っておられます。とはいえ、胎児に影響があるようなものではありませんのでご安心を」
「……そうか」
静かに呟いたライアスは、表情をなくし、先ほど座っていた長椅子に少し乱暴に腰を落とした。
「……望んでいたことだというのに、なんとも間の悪いことだな」
俯いているせいか、皇帝の声はくぐもって聞こえた。
「陛下。このこと、アキ様には？」
「……」
「子に罪はありませんぞ、陛下。確かに今の皇后様は記憶をなくしておられるが、お身体に宿った命は、陛下と皇后様の深い絆の証でしょう」
「……そんなこと、俺が一番分かっている」

医師が皇后の居室を去った後、ライアスは一人でアキの眠る寝室へ入った。
皇后付の侍女は隣室に控えているが、エルマーは「公務の方はお気になさらず」と言って下がって行った。
小さく寝息を立てる妻の寝顔は、いつも通りの穏やかなそれだ。
「目覚めても、お前はまだ俺を思い出さないのか……？」
そっと、顔にかかる前髪を横へ流す。露わになった額に、優しく口付けた。
アキが眠る寝台の縁に腰かけ、掛布の上に置かれていた白い手を握って、自らの頬を寄せる。
「どうやらお前の身体には、俺の子が宿ったらしい。それを聞いたら、今のお前は絶望するのか？　産んで欲しいと願うのは、俺の欲目か……？」
持ち上げられていたアキの手に、滴が伝った。
眠る妻を切なげに見つめる夫の瞳は、涙で僅かに視界が歪んでいた。

皇后の存在

さらさらと書類を滑るペンと紙の音ばかりが響く、そこは皇帝の執務室だ。

皇后の身に起きた一大事もひとまず落ち着いたところで、皇帝は僅かに皇后の寝室に留まったかと思えば昼下がりにはこうして普段通りに、むしろそれ以上の集中力をもってして公務に取り組んでいた。

皇帝の側近エルマーは、その様子を改めて目にすると人知れず嘆息した。

「昼食、あまり手をつけていらっしゃいませんでしたが、大丈夫ですか？」

見かねて声をかけてみる。

「十分だ。あまり食べる気になれないんだ」

いつも以上の集中力も、やはり思考をアキのことに向けないためなのだろう、とエルマーはライアスの様子から察した。

「相当堪えているようですね。公務の方はお気になさらずとも、昨日でひと段落ついているのですから、アキ様の傍についておられても良かったのに。確かに記憶のない今のアキ様はただの妙齢の女性かもしれませんが、だからといって皇后の寝室に皇帝であるあなたが居たって誰も何も言いませんよ。それとも、傍にいらっしゃる方がお辛いですか」

書類を確認する手をそのままに、エルマーはひたすらペンを走らせるライアスに淡々と問うた。

「目覚めたら知らない男が手を握って寄り添っていた、なんてこの上なく気味が悪いだろう。目覚めたら呼ぶように言ってあるから、そのときにまた顔を見てくる。それまでは、何かしてないと落ち着かんのだ」

「左様で」

「仕事が無いというなら剣でも振ってくるし、それがだめなら馬を走らせてくるぞ」
「ご安心を。目を通していただきたい書類はまだございますよ。その方が良いと仰るなら構いませんが、あまり根をお詰めになりませんよう」
「わかっている」
　憮然としたライアスの返事が返ってきたところで、執務室の扉がノックされた。
「――どうぞ」
　エルマーが書類を机に置き、扉の向こうへ答えた。
「失礼いたします」
　そういって顔を出したのは扉の向こうで常に控えている近衛騎士の一人だ。
「皇太后様からの言伝を持った者が来ております」
「言伝？　直接会いたいと言っているのか？」
「できればそのように、と」
「……そうか。では陛下に伺ってくるので、しばし待ちなさい」
　はッ、と頷いた騎士を残し、エルマーは執務室の奥へと戻る。
「太后様がどうかしたのか」
　聞こえていたらしいライアスは一瞬だけ動きを止めて尋ねた。
「皇太后様のお言伝を持った者が来ているようで、出来れば陛下にお会いしたいと」
「……まさか、アキの件がもう伝わったわけではないだろうな」
「一応箝口令はしきましたが……その可能性は無いとは言い切れません」
「案外早かったということ……あ」
　険しい面持ちで頭を抱えたライアスが、何かに思い当たったのか突然表情を固めた。
「どうかなさいましたか？」
「思い出した……そういえば、アキは何日かに一度皇太后のもとを

訪れて話し相手をしていたんだった。今日がその日なんじゃないか？」
「早急に確認しましょう。女官が何らかの連絡をしているとは思いますが、皇太后様が不審に思ったのかもしれません」
「はあ……あの方は色々と考えが先走りすぎるから。慎重にな。とりあえず、言伝を聞こう。通せ」
「かしこまりました」

「――つまるところ、皇太后様は皇后アキ様がご懐妊されたのではないかとお考えでございます」
皇太后の言伝を持ってきた皇太后付の女官は、表情を一切変えずすらすらとそう言ってのけた。
「……ほう」
記憶がどうたら、ということはまず伝わってないらしいと分かって、ライアスはひとまず安堵した。
この女官から話を聞いた限りでは、本日予定されていた訪問がアキの体調不良で中止されたため、皇太后はもしやアキが懐妊したのではないかと勝手に推測しただけで、別にどこからか情報が漏れたわけでもなさそうだった。
「それは、皇太后様におかれてはさぞお喜びになっただろうな」
努めて平静を保ち、ライアスは皇帝の顔でそう答えた。
「はい。それはもう。ですがまだ確証がございませんでしたので、私を陛下の元へと向かわせた次第でございます。もし真実ならば、お祝い申し上げる、と」
「そうか。それはありがたいことだが、私のもとに皇后が懐妊したという知らせは届いておらん。少々体調を崩した、という話は聞い

ているがな」
「左様でございますか」
「ああ。皇太后様におかれては、お喜びのところ申し訳ないが、懐妊はしていないと伝えてくれ」
「承知いたしました。では、そのようにお伝えいたします」
ライアスが下がるよう言うと、女官は一礼してその場を後にした。
扉から女官が出て行ったことを確認したエルマーが、小さく息を付いた。
「ひと安心ですね」
「太后に知られては、面倒な事態になりかねんからな……しかしこのまま体調不良で突き通すのも難しいだろう。あの方は「病」という言葉にも敏感だ。兄上のことがあるからな」
「何か策を考えなければなりませんね」
「そうだな。それもこれも、まずはアキと落ち着いて話をしないと」
ライアスの眉間のしわが、徐々に深まっていく。
「アキ様のご懐妊が確実になれば、今後箝口令にも限界が出てくるかもしれません。アキ様の協力を得られるのが、今のとこは最善策ですね」

怪我の功名

皇帝の執務室には、相変わらずとめどなくペンの滑る音が響いていた。
ライアスは目を通してはペンを滑らせ、次々と積み上げられている書類を処理していく。いつも以上の手際の良さだ。
「――陛下、追加の書類です」
書類が無くなりかけた頃合いを見計らい、エルマーが新たな書類の束を執務机の脇に置いた。
ところが、その束は先のものより随分と厚さが減っていた。
ライアスは不審に思って側近を見上げた。
「おい、やけに少ないな」
「本日処理していただきたいものは、これで最後です」
「そんなハズ無いだろう。あるものはあるだけ出せ」
平然と返してきたエルマーに、ライアスは少しムッとして言った。
「既に予定よりも、三日ほど多い量をこなされておいでです。陛下ばかりが頑張られても、政治は動きません。いつも申し上げていますが、重要なのは均衡です。あまり急ぎすぎても、次でつかえてしまいます」
「エルマー、アキのことなら…」
「それはそれ、これはこれです」
「……さっき仕事はまだまだある、と言っていたのはどの口だ。結局俺は剣でも振ってこなければならないようだな」
小さく嘆息し、平然としている側近を見上げた。
「結構。では、剣をおとりになる前に残りの書類は片づけてくださいね」
「……鬼だな、お前」
「お褒めにあずかり光栄です」
褒めてない、と仏頂面で返すと、ライアスは再び書類に目を通し

始めた。

書類仕事を終えると、エルマーに執務室を追い出されたライアスは一人で庭園に出た。

庭園には誰もいない。皇帝付の護衛もいない。しかしこれはあくまで目に見える護衛はいないという意味だが。

庭園の中央までゆっくり進むと、視界に現れた花壇にとある花を見つけた。

その場にしゃがんで、そっと指先で花に触れる。

アキがいた世界にあった花に似ているというものだった。自分のいた世界にあったものと似ているが故なのか、元々好きなのか、アキはその花をよく好んで部屋に飾っていた。

「……お前も、ひょっとしてあちらの世界から来たのかもしれないな」

アキがこの花を見て表情を緩める度、どこかライアスの胸はちくちくと痛む。自分の故郷を懐かしんだり、恋しく思う気持ちは誰しも持っているものだが、アキの場合は最早距離どころの問題ではない。もしあちらの世界へ帰してやることができるとして、アキがそれを望んだら、自分は快く彼女を送り出せるだろうか。――まさか、そんなことできるわけがない。幾度となく繰り返してきた自問だった。

アキがこの花を見てあちらの世界を思うのなら、と考えると、ライアスはたまらなくこの花が憎い。一方で、純粋にアキがこの花が好きだというのなら、ライアス自身もこの花を好ましいと思う。

アキに宿ったのは、間違いなくライアスとアキの子だ。

アキとの子どもなら、ライアスには愛しくてたまらない。けれど、

今のアキには同じように思えるはずもない。
「手放すことなど、もう出来ようもないというのに……何故、今なんだ」

ふと視線を感じてライアスが顔を上げると、そこには侍女に付き添われたアキが立っていた。
部屋着に、簡素な外套を羽織っている。どうやら起き抜けにここへやってきたらしい。
ライアスは立ち上がると、気持ちを落ち着けるように一つ息を吐いてから、ゆっくりとアキたちの方へと近づいて行った。
「もう、起き上がっても平気なのか？」
目覚めたら同じベッドにいた男に再び話しかけられ、少し身構えたアキだったが、ライアスがいること自体は分かっていたらしく、それ以上の動揺はなかった。
『……えっと、心配してくれてるのかな？　それなら、おかげさまでって感じなんだけど』
どうやらニュアンスはなんとなく伝わっているようで、どうにか身振り手振りで「大丈夫だ」と言われているようにライアスには見えた。
「相変わらず、こちらの言葉は話せないようだな。まあ、元気ならそれでいい」
『ところで、今朝あなたが言ってた私たちがその……奥さん、旦那さん、って話なんだけど』
「……ん、『オクサン、ダンナサン』……どうして俺たちが夫婦なのかってことか？　記憶が無いのでは、今のこの状況が理解できないのも無理はない。そうだ、お前の部屋に行こう。あそこに良いものがある」

言って、ライアスは侍女にアキをアキの私室へ連れて行くよう命じた。
『お、通じた？　――って、え。どこに行くの？』
侍女に促されるも、状況がつかめずアキは慌てる様子を見せた。
「アキ様、大丈夫です。陛下はアキ様のお部屋に戻ってお話しなさりたいと仰っただけですから」
『え、何？　部屋に戻るの？　でも、まだ話が……』
「先に行っていてくれ。俺もすぐに向かう」
ライアスは微笑みかけると、そっとアキの髪を撫でた。
『……』
一瞬瞠目した後、アキは僅かに顔を上気させた。大人しくなった彼女を、侍女が再び促して王妃の私室へと向かって行った。
そんなアキの様子を見て、実はアキ以上に内心動揺しまくっていたのは当のライアスだったことは、彼以外誰も知らないだろう。
「……あんな初々しい反応、何年振りだ」
緩みそうになる表情を手で必死に覆い、しばらくの間その場に立ち尽くす皇帝。
（これがまさか、けがの功名というやつか……！？）

怪我の功名（後書き）

皇帝、ちょっとアホなのかもしれません。
シリアスばっかりだとついこういうネタをいれたくなってしまいます。

覚えのない現実

「そう、それで……」

ライアスはアキが理解して頷くのを確認すると、再び紙に日本語の単語を並べていく。大量の紙の横には、先ほどからライアスが単語を調べるために使っている辞書のようなものが開きっぱなしで置かれている。

それは以前からアキが時間があれば覚えている限りの単語を書き出し、こちらの世界の言葉に訳してまとめてきたものだ。

ライアスの言う「良いもの」とは、このアキの辞書のことだった。ライアスはこれを駆使し、アキに説明を続けていた。

ゆっくりではあるが、ライアスが書いているのはアキの目から見ても確かにカタカナの文字だった。

ライアスが書くのに合わせて、アキは視線でその文字を追うと同時にそれらを発音していく。

『イチ　ネン　マエ　ケッコン　ワタシ　アナタ』

接続詞が無く、時々語順がおかしいと感じてアキが顔をしかめることはあるものの、意味は大体通じていた。

あまり大きくない、木製の丸いテーブルを囲んで皇帝夫妻がこうしてやり取りし始めてから時間はどれほど経ったのか。

侍女がお茶を取り換えたり、折に触れて休憩を入れてはどうかと進言するが、ライアスがアキに訊ねると彼女は首を振るばかりだった。

言葉も、自分の置かれている状況も、何も分からないなかにあって、今とにかく彼女が欲しているのは情報とか知識の類なのだ。ライアスの話を聞く熱心な姿から、彼もそれを痛いほど察していた。

『ケッコン…結婚……』

今朝の「オクサン、ダンナサン」に始まり、「結婚」という単語。ふと視線を手元にやれば、自分の左手薬指にはシンプルな指輪が輝

いている。
視線を上げてアキが自分の横を見れば、そこには吸い込まれそうな深い青をたたえた双眸がどこか切なげに彼女を見つめていた。
『あなたが、私の……本当に、ダンナサンなの……？』
状況を理解したい、その欲求はまだ尽きていないはずなのに、既に一度に詰め込めるキャパは限界だったのかもしれない。
（……何か、もう、おなかいっぱいっていうか）
――胸が詰まるような。
ふう、と息を吐いて俯いた瞬間、こぼれるように目から滴が落ちた。ポタポタと、腿のあたりの布地に次々と小さい水玉模様をつくっていく。
アキは、隣の男が息をのむ気配を感じた。
そうしたことを察知できるくらいに、頭は冷静だった。
むしろ、ライアスの話を聞いて驚いたりしていたときよりも思考は澄んでいるかもしれないとさえ思えた。
悲しいわけではなかった。泣きたいわけでもない。ただ、止まらない。
この涙の意味が、アキには分からなかった。
目の前にいる男が、本当に自分が生涯の伴侶として選んだ人なのか。確信は持てないでいた。
しかし、どこかで彼だけは信じたいと感じている部分があるのも確かだった。
『なんだろ……よくわからない……何で……？』
止まらない涙に困惑して、思わず笑いさえもれてしまった。
「アキ」
呼ばれて顔を上げようとするとガタっという音がして、アキが彼の動きを把握するより早く、ライアスが彼女を抱きしめた。

――大丈夫だ。

耳元で囁かれたのはアキの知らない言葉だったけれど、抱きしめる腕は確かにそう語っていた。

震えていたアキの肩が徐々に落ち着きを取り戻し、ライアスの胸には先ほどよりも心地よい重さが増していた。

気を利かせたのか、侍女たちは下がったらしく部屋の中にはアキとライアスの二人きりだ。

「どうだ、落ち着いたか？　一度に色々と詰め込み過ぎたな……疲れただろう？」

通じていないとは思いつつ、ライアスはこちらの世界の言葉で語りかけた。

それはもちろんライアスが完璧にアキの国の言葉を話せるわけではないから、ということもあるが、何となくでも良いから言わんとしていることを感じ取ってもらいたいという考えもあってのことだ。

記憶がいつ戻るのか、ましてや戻らない可能性だってあるけれど、言葉は徐々にでも身に付けられるはずだ。5年前、アキがこちらの世界にやってきたとき、実際に一から習得していったように。

「仕事のし過ぎで執務室を追い出されたくらいだ。明日も明後日も時間はあるはずだ。今度はもう少し余裕を持ちながらにしよう。……アキ？」

言葉の意味が分からないにしても、いい加減反応が皆無であることを不審に思ったライアスはアキの肩を掴んで体をわずかに離すとその顔を窺う。

「……眠ったのか」
独り言を話していたということに気づき、ライアスは一瞬憮然とした面持ちになる。
しかし次の瞬間には微笑に変わり、アキの頬を走る涙の跡を拭ってやった。
「泣きながら寝るなんて芸当、いつの間に覚えたんだ、お前」
泣いたせいか目の周りは赤味を帯びているものの、その表情はどこか安らかだ。
ライアスは椅子に腰かけたままだったアキを抱き上げ、横抱きにしたまま寝室に繋がっている扉を器用に開いて中へ入る。その間、アキは身じろぎ一つしない。
「記憶が無くなっても、寝つきの良さはさすがだな」
苦笑を漏らしながらも、ライアスはそんな些細なことに安堵していた。
深い眠りに落ちたアキの表情は穏やかで、今朝からの混乱など微塵も感じさせない。
ライアスは寝台に腰かけ、アキの顔にかかっている髪をそっと横へ流してやる。そのまま愛おしげに輪郭をなぞると、一瞬の躊躇の後寝台に手を付き、ゆっくりと上半身を傾けた。そして触れるだけの口づけを、露わになっているアキの額に落とした。
「……許せよ、これくらい」
どこかいじけた子供のような表情で、ライアスは苦笑を漏らした。

しばらくの間アキの寝顔を眺めていたライアスは、気が済んだのか寝台から腰を上げ、アキの上掛けをかけなおしてやると寝室から出た。

居室には、やはり侍女の姿は無かった。廊下へ通じている扉を開くと、すぐ横に王妃付の侍女が数人控えていた。
皇帝の姿を見とめた侍女は、静かに頭を下げた。
「待たせて悪かった。アキは疲れて眠ってる。夕食も食べずに眠ってしまったが、あれはおそらく朝まで起きないと思う。もし起きてきたら、何か温かいものでも出してやってくれ」
「――かしこまりました。陛下はご政務にお戻りになりますか？」
そう訊ねてきたのは、元はライアスの実の母に仕えていた女性だ。アキが城に入ってからは、ライアスの希望によって王妃付の侍女長となっている。
「いや、少し体を動かしてくる。エルマーが何か言伝でも置いて行ったか？」
「ええ。『執務室に戻ってこられても、仕事はない』だそうです」
「……そんなことだろうとは思っていたが。まあ、いい。――では、後は頼んだ」
ちらと背後の扉に視線をやると、ライアスは踵を返し練兵場の方へと向かった。
「お気をつけて」
残された侍女たちと護衛のため扉脇に控えている兵士たちが、深々と礼をして皇帝の背中を見送った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5965o/

皇帝夫妻の秘密

2011年3月11日01時40分発行